

歩けなければ死

福岡市博多区 中野 善次

昭和20年8月11日、所は旧満州（現在、中国東北部）の牡丹江省東寧県老黒山村に駐屯の兵営。もうすっかり寝静まっていた真夜中に、突然非常呼集のラッパが鳴り響いた。ソ連軍が国境を越えて侵攻してきたので、『迎撃のためこれから直ちに陣地まで出動する』と寝耳に水の発令だった。

外地には違いないが満州は戦地ではないと、どこかに甘えのあった思いが、この夜この時から一転して、激戦の地と覚悟を決める成り行きになった。本隊が南方に移動したのちの残留部隊で、手薄な兵力だったため、残されていた馬の頭数が人員よりも多いという状況になっていた。そこで馬の扱いに心得のない者であろうと、とにかく1人1頭は何が何でも曳いて行けということになった。町暮らして、馬のそばに寄ったことさえ無かった私にも例外はなく、夜道で20km先の陣地までの強行軍は、もう既に実戦に突入している行動と感じられた。小高い丘の上にある陣地に着いた時は12日の午前4時、展望ゼロの闇の中だった。

朝まだき、ぼうっと視界が開けてきた途端に、静けさを突き破る砲撃の洗礼を受け、その後もう無我夢中の交戦になった。だが戦車部隊を相手にして、山砲1門と一発元込めの歩兵銃という、大人と赤子の取り組みみたいな戦闘は、そのたった1門の山砲が集中砲火を浴びて、見るも無残、打つ手のない思いに歯ぎしりするばかりだった。砲音の切れ間に生死を確かめ合うように掛け合っていた声が、いつの間にか返ってこなくなり、ここが死に場所に決まったなと思ったその瞬間、「引け」と腹の底からえぐり出すような怒号の命令が耳を貫いた。

丘の上から相手を見おろしての位置だったので、後退の下り坂は転がり落ちるビー玉のようだった。だがこの坂に同じ兵舎に起居を共にしていた戦友は言うに及ばず、誰ひとり前にも後ろにも人影を見ることは無かった。どこかで草を踏む足音が聞こえて、それが人のいることを知らせてくれただけだった。そして平地の道にたどり着いた時、そこにはどこの誰とも分らない兵隊ばかりが4名散らばっていただけだった。誰からともなくこの5人が一団となって、戦車を避けるための方角へ歩き始めていた。

そのうちに、時折、この道に降りて来る兵隊を見るようになったが、申し合わせたようにそれぞれ見知らぬ同士ばかりの寄り集まりで、自分たち同様に、たまたま顔を合わせたのが縁という人たちのようだった。老黒山の兵営から歩き続けて、これからまたどれだけ歩き続けることになるのか、お互いが助け合う体力も心の余裕もさらさらなく、足の痛みをこらえ切れなくなった一人が、「先に行ってくれ」と言って道端に座り込めば、「また後から来る集団に出会って、その時歩く気になればそれに加わって歩けばよい」と割り切った淡白な別れになる。ここで別れたらもう二度と会うことはないだろう、というそんな感傷はない。自分自身がどうな

るのかということだけに心を集中させた。これは命がけの歩きとなっていたのである。

まるきり眠らずに歩くことなどできるはずがない。一日に3時間ばかり、その気になればあつという間に眠りこけるのだが、その場合も交代で寝ずの番をする。時として日本兵同士の足音に、お互いがすわ敵とばかり身構えて、はっとする一幕もあったりして、24時間心の安らぐことはない。三日、四日と山坂を抜けたり、歩き続けて、足の裏は全面水ぶくれになったような状態でも、もう歩けないと座りこめば、そこが死に場所になる覚悟をせねば……そんな切迫感で演習や訓練では及びもつかない忍耐力に、自分が自分でないような思いになっている。

ここまで来る途中で、こんな残酷な話を聞かされた。国境近くの軍の病院に入院していた患者の兵隊に「歩ける者は無理をしてでも歩け、動けぬ者は自決せよ、自分で自決できない者は衛生兵が手伝ってやれ、捕虜になって地獄の苦しみを味わせるより、それが思いやりである」とそう命令されて、仕方なしに始末してきたと、やりきれない告白をするように語りかけた衛生兵の顔面は引きつって、体が小刻みに震えていた。歩けなければ死ぬしかない。それは私たちの身の上にも重なってくる思いでずしりと胸に伝えた。

食糧の補給のために、敦化という町に降りて来たのが16日。泥と汗にまみれた軍服に小銃、帯剣の出で立ちだった私たちと通りすがりに顔見合わせた日本人の男性から、家の裏側に引きずり込まれるように誘い入れられ、「昨日15日に敗戦の報道があって武装解除になっているんですよ、こんな格好で見つけられたらとんでもないことになりますよ」と血相を変えての注意だった。「そんな馬鹿なことが……」数日前、死を覚悟したほどの戦闘をしてきたばかりの私たちには、簡単に信じられるようなことではなかった。だがそこに私たちのことを聞いて集まって来た5、6人の日本人から、口を揃えて「本当の話です」と言われてみれば、信用するしかない思いに、なぜかほっと肩の荷が軽くなった感じがしていた。

軍服を中国人の服に着換えさせるなどの世話を受けて、とにかく新京の部隊まで行き、そこで身の振り方をつけようということにしたのだが、数日前に国境で戦死した友のことや、自決という名で死を余儀なくされた人のことなど、やり切れない思いが四六時中頭の中を駆けめぐって私を悩ませた。

そうしてたどり着いた新京の部隊が、シベリヤの捕虜収容所へ送り込まれる出発点になり、またまた私は凍土を歩き続けることになった。19歳でのこの体験は、今も生々しく、思い出などという気にはなれない。